

不詳扱いの彫版師たち

—日本で開催される「ルーヴル美術館の銅版画展」—

Les Graveurs Traités Anonimus en Expositions de la Chalcographie du Musée du Louvre au Japon

神谷 佳男
KAMITANI Yoshio

はじめに

2022年5月、国内で「ルーヴル美術館の銅版画展」を見る機会があった。展覧会会場では版画作品と共にルーヴル宮殿の写真などが展示され、入り口近くの壁面に注意喚起する小さなパネルには4つの注意事項があり、そのうちの一つに「彫り師は、その多くが不詳のため、キャプションに彫り師名は記載していません。」と書かれていた。また会場で販売されているカタログ『La Chalcographie du Musée du LOUVRE ルーヴル美術館の銅版画展』の凡例などにも同様に「彫り師は、その多くが不詳のため、本展では作品情報および出品リストに彫り師名は記載していない。」と明記されている。

しかし同展に出品されている多くの版画作品には、マージン部に小さな文字で、作品名、原作者名、印刷工房名、彫り師（以下彫版師）名、その他様々な情報が読み取れる。にもかかわらず、「不詳」とはどのようなことか。

展覧会を鑑賞し終え、彼ら彫版師たちの名を明らかにしたいとの思いを強く抱いた。本稿では彫版師名を調査することを主たる目的とする。

ルーヴル美術館の銅版画展

釧路市美術館で2022年4月29日から7月3日まで開催された「ルーヴル美術館の銅版画展」を訪問するきっかけは、インターネットの検索で偶然目に留

まったからだ。

「ルーヴル美術館の銅版画展」と聞けば、巨大なルーヴル美術館が誇るグラフィック部門の膨大なコレクションにデッサンと同じく夥しい銅版画コレクションがあり、その一部を日本で展示しているのだと考えるのが自然だろう。

釧路市に続き北見市でも開催された「ルーヴル美術館の銅版画展」の案内チラシには日本語の展覧会名「ルーヴル美術館の銅版画展」のほかに、フランス語でLa Chalcographie du Musée du LOUVREと書かれていた。しかし同展会場で販売しているカタログの表紙と背表紙にはLa Chalcographie du Musée du LOUVREのフランス語の表記しかなく、カタログのページをめくらないと「ルーヴル美術館の銅版画展」という展覧会名がわからない。

また「銅版画展」という表現が含まれる展覧会名のため、銅版画作品のみに限定された展覧会だと想像するが、実際には木口木版とリトグラフの技法で制作された版画作品も展示されている。つまり、日本語の展覧会名と展示作品が一致しないのである。

La Chalcographie du Musée du LOUVREをそのまま訳すと「ルーヴル美術館のカルコグラフィー」となる。これまで、「ルーヴル美術館のカルコグラフィ」または「ルーヴル美術館カルコグラフィー」の名の付く展覧会が日本で開催されたことはあった。今回筆者が訪問した展覧会名は「ルーヴル美術館の銅版画展」であり、その案内チラシに「La Chalcographie du Musée du LOUVRE」の表記もあ

ることから、「La Chalcographie du Musée du LOUVRE」展でもあると解釈すべきだろう。日本語で書かれた「ルーヴル美術館の銅版画展」とフランス語で書かれた「La Chalcographie du Musée du LOUVRE」は一見同じ内容を示しながら、実は同じ意味ではない微妙な違いを含んでおり、日本語とフランス語の両方を併記する必要があったということなのか。

つまり、Chalcographieというフランス語が意味する世界を伝えることがいかに難しく困難きわまるかを示していると考えられる。それでは釧路市立美術館と北網圏北見文化センターではカルコグラフィーをどのように定義しているのか？各館それぞれが作成した「ルーヴル美術館の銅版画展」の案内チラシをみると、「カルコグラフィーとは、ルーヴル美術館の銅版画原版コレクション保管室およびその工房で印刷された版画を指します。」と両展覧会は全く同じ説明文を使用している。しかし、「カルコグラフィー」を一言で説明するのは、極めて困難である。

カルコグラフィーとは、銅板に描かれたものを意味するギリシャ語を起源とするフランス語である。¹ したがって単純に銅版で刷られた作品もしくは銅版の型（原版）と考えれば良いと思いがちだが、そう簡単な話ではない。筆者が初めて「ルーヴル美術館のカルコグラフィー」と呼ばれている施設を訪問したのは2004年。そう、カルコグラフィーは施設の名前でもある。その頃友人のフランス人たちに「ルーヴル美術館のカルコグラフィー」を知っているか尋ねたことがある。残念ながら版画を専門とする人たち以外には全く知られていなかった。

ルーヴル美術館だけがカルコグラフィーと呼ばれる施設を持っているわけではない。ベルギーのブリュッセルにもあり、貴重な原版コレクションを活かして印刷している点、ルーヴル美術館のカルコグラフィーと同じである。またイタリアのローマにもカルコグラフィアがあり、ルーヴル美術館のコレクションを上回る2万点以上の原版コレクションがあるとされている。この他、筆者は訪問してはいな

いが、マドリッドにもカルコグラフィアと呼ばれる施設があるという。カルコグラフィーと名の付く施設はヨーロッパに4か所あり、それぞれの施設に原版コレクションが立派に存在する。

さて、ルーヴル美術館のカルコグラフィーの施設の話に戻すと、原版は建物の1階と2階のそれぞれ鍵のかかる保管室の中に、一枚一枚それぞれの整理番号が付けられた不織布製の袋に入れられ、金属製の棚に薄い書籍のように並んだ状態で保管されている。

他に大きな部屋があり、印刷用プレス機、インク練り台などがある。また印刷した作品を乾燥させる部屋が別にある、他にも制作に使用する腐蝕室が備えられ、銅版画の制作から刷りまでの一切の設備と原版の保管室を備えた版画工房である。ただ銅版に鉄メッキを施す装置はなく、鉄メッキは、ただ版画作品の水彩による着色作業同様、外部に発注している。ルーヴル美術館のカルコグラフィーは、上記の設備のほか以下の要素を持った工房であると筆者は考えている。

- ルーヴル美術館所蔵の14000点の原版の保管
- 原版コレクションの印刷と版画作品の販売
- 原版コレクションの更なる充実
- 現代作家に依頼し版画の今日の在り方の模索
- 原版の文化財的価値と印刷技術・文化の伝承
- ルーヴル美術館の歴史と意義を伝える広報活動

この「ルーヴル美術館のカルコグラフィー」の工房の活動のほか、工房で刷られた版画コレクションや原版コレクション、さらに版画カタログや原版カタログを含めて「ルーヴル美術館のカルコグラフィー」なのである。

そもそも「ルーヴル美術館の銅版画展」は2022年の釧路市美術館や北見市の北網圏北見文化センターに限って開催された展覧会ではない。インターネットで検索してみると、日本各地でこれまで多数開催されてきた事実を知ることができる。

2021年に秋田県立美術館、2020年は佐世保市博物館 島瀬美術センター（長崎県佐世保市）、2019年バ

ラミタミュージアム（三重県三重郡菟野町）、2014年
しいのき迎賓館（石川県金沢市）、同じく2014年はう
らわ美術館（さいたま市浦和区）でも開催されてい
たようだ。

このように「ルーヴル美術館の銅版画展」が日本
各地で数多く開催されてきたが、これらの展覧会は
同展のカタログを2013年に発刊したステップ・イー
スト社によるものと考えられる。

このカタログに収録されている版画作品総数は
130点。各展覧会会場の展示室に合わせて作品の展
示に違いがあるものの、おおよそ130点の版画作品、
銅版画技法の解説、カルコグラフィー版画工房の
トップだったフランソワ・ボードカンによる刷りの
デモンストレーションの動画上映、ルーヴル美術館
内外の写真、また時にはヴェルサイユ宮殿の写真も
壁面を飾っているという具合である。この「ルーヴ
ル美術館の銅版画展」の展覧会カタログには、巻末
に原作者略歴と出品作品が掲載され、作品鑑賞に大
いに役立っている。

上記の展覧会とは企画が異なるが、2003年メル
シヤン軽井沢美術館で開催された「『ルーヴル美術
館カルコグラフィー』展 ルイ14世の時代から受け継が
れる銅版画の歴史と現代」(LA CHALCOGRAPHIE
DU MUSÉE DU LOUVRE : Reflets et visions en
estampes, XIII^{ème}-XVI^{ème}: quatre siècles de cuivres
gravés)がある。主催がメルシヤン軽井沢美術館、
企画がルーヴル美術館カルコグラフィー室、RMN
(フランス国立美術館連合)、そしてRMN Japon (フ
ランス国立美術館連合日本法人)で、143点の版画作
品と5点の原版が展示された。パリからカルコグラ
フィー版画工房のフランソワ・ボードカンを招聘し
銅版画のワークショップを開催するなど、大規模な
展覧会だった。同展カタログには展示作品をすべて
掲載しているわけではないが、彫版師たちの記載が
ある。

さらに遡ると、1974年新宿・伊勢丹本館7階クロー
バーホールで開催された「ルーヴル美術館のカルコ
グラフィ」が挙げられる。同展カタログの読売新聞
社のあいさつ文には、「今回、ルーヴル美術館のご好

意で、同美術館所蔵のぼう大な絵画コレクションを、
銅版で制作した特殊な版画（カルコグラフィ）と、
同じく、同館が保有する、無数の彫像を石膏で原寸
のまま再現したムラージュを、ルーヴル博美術品の、
異色な紹介として初公開いたします。」(原文引用)
とある。「初公開」とあるように、ルーヴル美術館所
蔵の原版から刷られた版画作品を一堂で紹介したお
そらく日本最初の展覧会となった。同カタログの
モーリス・セリュラス (Conservateur en Chef du
Cabinet des Dessins, Palais du Louvre, Paris.
Maurice SERULLAZ) のあいさつ文に「ルーヴル美術
館の協賛でこのような大規模な展覧会が開催され
るのはフランス国外では初めてとなる」(筆者訳)と
書いているし、坂本満が『21世紀版画』10月号(199
0年10月27日発行、21世紀美術出版、p129)で「カル
コグラフィの古今の作品から選ばれた版画展が、筆
者の知る限りでも一九七三年からフランスの内外で
開かれているほどである。」と書いていることから、
どうやら1973年に『ルーヴル美術館カルコグラ
フィー』展がおそらくフランスで大規模に開催され、
翌年1974年3月にフランス国外初となる新宿・伊勢
丹で「ルーヴル美術館のカルコグラフィ」が開催さ
れ今日まで継続していると考えられる。

昨今と比較して情報量が圧倒的に少ない時代にも
かかわらず、1974年に新宿・伊勢丹で開催された
「ルーヴル美術館のカルコグラフィ」展のカタログ
にも、1990年に出版されたアートマガジン『21世紀
版画』や2003年メルシヤン軽井沢美術館で開催さ
れた『ルーヴル美術館カルコグラフィ』展の冊子に
も、彫版師たちの名が記載されており、彫版師たち
が「不詳」扱いされることはなかった。

彫版師たち

2013年ステップ・イースト社が発行した「ルーヴ
ル美術館の銅版画展」のカタログには、版画作品の
彫版師たちは「不詳」という扱いを受けていること
は既にも書いた。カタログの巻末の「原作者略歴」欄
もまた「不詳」扱いを受けている作者が複数ある。

筆者はこの「不詳」扱いに納得できず、釧路市美術館と北網圏北見文化センターの「ルーヴル美術館の銅版画展」の会場に複数回足を運び、時間をかけ、展示作品の中に刻まれている彫版師たちの名前を丁寧に調べ明らかにすることにした。彼らの氏名が時にはイニシャルだけの簡略された表記であったり、綴りの違いがあったり、文字情報がない場合、E. BÉNÉZIT の『版画辞典』(Dictionnaire critique et documentaire des Peintres, Sculpteurs, Dessinateurs et Graveurs, Nouvelle Édition, Librairie Gründ, 1976) や『La Chalcographie du musée du LOUVRE』(Édition de la Réunion des musées nationaux, Paris, 1993)、そして1974年3月新宿・伊勢丹本館7階クローバーホールで開催された「ルーヴル美術館のカルコグラフィ」展のカタログ『ルーヴル美術館のカルコグラフィ』、またインターネットのウィキペディアの情報なども参考にしながら、彫版師たちの名を明らかにすることにした。

彫版師名の一覧表を作成した際、基本的には2013年ステップ・イースト社発行の『La Chalcographie du Musée du LOUVRE ルーヴル美術館の銅版画展』に記載されている作品番号、作品名、原作者名に従った。ただし、作品番号122番の「マンドラゴラ」の原作者名は、ステップ・イースト社刊カタログではニコラ・ロベールとなっていたが、ジョルジュ・デュプレシーの『アブラアム・ボスの作品カタログ』はじめいくつかの資料ではアブラアム・ボスのオリジナル作品扱いだったこと、原画の作者名についての表記が展示されていた版画作品に見当らなかったことからボスの作品とみなした。²この他、原作者名欄のカタカナ表記に若干の相違が2例ある。ステップ・イースト社発行のカタログ表記ではボスとなっているが、彫版師名同様ボスに統一した。また129番、130番の原作者名はカタログではユージェーヌだが、ウジェーヌに統一した。この表記の違いは、フランス語の音により近い表記と筆者が判断したためである。

彫版師名は、作品名と原作者名とともに別表に記載されている。

作品番号103、105、106、107、108、109、110、111、116の9点はリトグラフ技法で制作されたもので、金属板を彫刻しているわけではない。彫版師という分類に含めてしまうのは適切ではないと考えるが、描画者あるいは製版師という表記は省略した。

おわりに

「ルーヴル美術館の銅版画展」はおそらくこれから先も日本各地で開催され巡回し続けるだろう。

版画という紙媒体のおかげで、多額の輸送費がかかるわけでもない。そのうえ原画があれば今後も刷ることが可能となる。つまり1点しか存在しないという希少性が問われることもないし、複数性が特徴の版画であることから、気を使って美術品扱いしなくても良いとの解釈がある。となれば、搬入と搬出時の立会いも時には必要なく、2001年のアメリカ同時多発テロ以来高騰していると言われている美術品に対する保険料も、ここでは気にすることもない。

さらに総数130点の版画作品には名画を原画にもつ作品が多数見られ、西洋美術の流れを説明するには都合がよく、美術館の教育活動の観点からも立派な学習教材となり得る。

また展覧会を担当する企画会社は、これまでの実績とノウハウを蓄積しているし、美術館に安心感さえ与えるのである。

ただ日本各地で「ルーヴル美術館の銅版画展」にかかわってきた人たちがこれまで数多くいたにもかかわらず、版画作品の彫版師に対して「不詳」というレッテルを貼って済ませている現状には不満だ。

写真のない時代、銅版画の素晴らしい技術を身に付け、また当時の社会で大いに認められた彫版師たちに対し、我々はもう少し敬意を示すことができたらと切に望む。一方、目まぐるしく変化する社会の中で、刺激的な動画に囲まれた生活環境の我々にとって、多くのモノクロ版画作品で構成された地味な展覧会の作品と向き合うのは難しい状況だということもわからないわけではない。

今回の調査は作品を観察することの重要性に気付

く機会でもあった。例えばニコラ・プッサンの「豊かな田園風景」はステファン・ボーデがニコラ・プッサンのオリジナル作品から彫版したのではない。プッサンの作品を描いたモニエの画をステファン・ボーデが版画に起こしたということ、delineavit³という細かい文字とモニエの名前を画像下の文字情報から見つけ、知ることができた。このほか、カルコグラフィの工房以外の場所で刷られていたことを示すパリ市内の工房名が書かれた作品もあった。⁴

「ルーヴル美術館の銅版画展」の鑑賞では、それぞれの作品に秘められている膨大な文字情報を読み取ることができるのだが、それらの大切な情報を見落とし、そのことを気にかけることなく過ごしている実態を、今一度客観的に見つめ直す機会を提供したと考えている。

註

- 1 ルーヴル美術館のカルコグラフィについて、拙稿「ルーヴル美術館のカルコグラフィ」『金沢美術工芸大学紀要』第54号（2010年3月、59-72項）を参照されたし。
- 2 ジョルジュ・デュプレシーが1859年に著したアブラム・ボスの作品カタログには、第265番にMandragora mas (mandragore) (no3669)が記載されているが、「マンドラゴラ」の原作者と彫版師は、ともにアブラム・ボスと書かれている。尚、括弧の3669番はデュプレシーが1851年発刊されたルーヴル美術館カルコグラフィのカタログ番号から引用したものである。
『CATALOGUE DE L'OEUVRE DE ABRAHAM BOSSE』Georges Duplessis, Paris, 1859
- 3 ルーヴル美術館の銅版画展に展示されている多くの作品に文字情報が書かれている。
例えばpinxsit, SCULP, SCULPT, del et Sculptなどと共に作者名がある場合、PINXITには絵を描いた作者名、SCULPもしくはSCULPTには彫版者名となる。そして時にはDEL et SCULPと書かれている場合もある。DELはDELINEAVIT同様デッサンや絵を描くことでありSCULPは彫ることすなわち彫版する者を表すため、描いて彫っている作者ということになる。つまり版画のオリジナル作品の作者を指す。アンドレ・ベギン著『DICTIONNAIRE TECHNIQUE DE L'ESTAMPE』に詳しい。
- 4 レオナルド・ダ・ヴィンチの「老人の頭部」(27番)、ミケランジェロの「子供を抱えて座る女の習作」(29番)、そしてマンテーニャの「ユディット」(35番)ではパリにあったドゥルアルの印刷所の名前が刻まれている。
Imp. De Rrouart, 11 rue du Fouarr Paris

他にピエロン印刷所(Pierron Imp. Rue Monfaucon 1)などの名が刻まれた作品もある。(86、87、88番)

参考文献

- ・「La Chalcographie du Musée du LOUVREルーヴル美術館の銅版画展」カタログ、監修・執筆：中村隆夫 発行：ステップ・イースト、2013
- ・「『ルーヴル美術館カルコグラフィ』展 - ルイ14世の時代から受け継がれる銅版画の歴史と現代 -」カタログ、執筆：マエリス・トベナ、フランソワ・ボドゥカン、発行：メルシャン軽井沢美術館、2003
- ・「ルーヴル美術館のカルコグラフィ 203 GRAVURES DE LA CHALCOGRAPHIE DU MUSÉE DU LOUVRE」カタログ、発行：伊勢丹、1974
- ・「21世紀版画」10月号 発行：21世紀美術出版、1990
- ・「世界版画体系」筑摩書房、1974
- ・“DICTIONNAIRE TECHNIQUE DE L'ESTAMPE” ANDRÉ BÉGUIN, IMP. Durand, 1998
- ・“Dictionnaire critique et documentaire des Peintres, Sculpteurs, Dessinateurs et Graveurs” E. BÉNÉZIT, Librairie Gründ, 1976
- ・“CATALOGUE DE L'OEUVRE DE ABRAHAM BOSSE” Georges Duplessis, Paris, 1859
- ・“DICTIONNAIRE DE L'ESTAMPE EN FRANCE 1830-1950” Janine Bailly-Herzberg, FLAMMARION, 1985
- ・“La Chalcographie du musée du LOUVRE” Edition de la Réunion des musées nationaux, 1993
- ・“Peter HAWKE (1801-1886): artiste voyageur et saint-simonien” Marie-Françoise Bastit-Lesourd, 2012-2015

謝辞

本調査に対しご協力いただいた釧路市美術館の学芸員沼前広一郎氏と北網圏北見文化センターの学芸員松浦葵氏に改めて感謝したい。

(かみたに・よしお 芸術学／版画)
(2022年11月8日 受理)

ルーヴル美術館の銅版画展 La Chalcographie du Musée du LOUVRE			
番号	作品名	原作者名	彫版師名
1	アンジヴィリエ邸の庭から眺めたルーヴル宮の柱廊	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
2	ルーヴル旧館正面の眺め	ジャック・リゴー	ジャック・リゴー
3	ルーヴル宮殿正面玄関のペディメントのための2つの巨大な石を持ち上げるのに使用された機械の図	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
4	ルーヴル宮殿の図版の説明 グラン・オーダーの一部、中庭の一部 『パリとその建造物』『ルーヴル宮』	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
5	2階からのルーヴル宮柱廊の眺め 『パリとその建造物』『ルーヴル宮』図版3	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
6	テレグラフ下のルーヴル宮の玄関 『パリとその建造物』『ルーヴル宮』図版8	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
7	中庭内部から眺めたルーヴル宮 セヌ川側の入り口の光景 『パリとその建造物』『ルーヴル宮』図版10	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
8	ルーヴル宮殿の平面図と立面図 『パリとその建築物』『ルーヴル宮』図版1	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
9	ルーヴル宮殿中庭2階部分図	ルイ＝ピエール・バルター	ルイ＝ピエール・バルター
10	アルム広場の風景	イスラエル・シルヴェストル	イスラエル・シルヴェストル
11	ヴェルサイユの大階段の内観	ジョゼフ＝マリー・シュヴォテ	ルイ・シュルグ
12	迷宮の地図 『ヴェルサイユの迷宮』図版1	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
13	イソップとアモルの彫像 『ヴェルサイユの迷宮』図版2	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
14	大公と鳥たち 『ヴェルサイユの迷宮』図版3	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
15	吊り下げられた猫とねずみたち 『ヴェルサイユの迷宮』図版7	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
16	孔雀とカササギ 『ヴェルサイユの迷宮』図版11	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
17	狐と鶴 『ヴェルサイユの迷宮』図版13	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
18	猿王 『ヴェルサイユの迷宮』図版25	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
19	猿と猫 『ヴェルサイユの迷宮』図版29	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
20	複数の頭をもつ蛇 『ヴェルサイユの迷宮』図版33	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
21	狼と頭 『ヴェルサイユの迷宮』図版39	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
22	雌アヒルとバーベット犬 『ヴェルサイユの迷宮』図版41	セバスチャン・ル・クレール	セバスチャン・ル・クレール
23	三美神（「春」の部分）	サンドロ・ボッティチエリ	アンドレ＝シャルル・コピエ
24	岩窟の聖母	レオナルド・ダ・ヴィンチ	オーギュスト・デノワイエ
25	イザベラ・デステの肖像	レオナルド・ダ・ヴィンチ	アルフォンス・ルロワ
26	モナ・リザ	レオナルド・ダ・ヴィンチ	オーギュスタン・ブ利多ゥー
27	老人の頭部	レオナルド・ダ・ヴィンチ	アルフォンス・ルロワ
28	鉢を持つ聖母	コレッジオ	アルフォンス・ルロワ
29	子供を抱えて座る女の習作	ミケランジェロ・ブオナローティ	アルフォンス・ルロワ
30	パリスの審判	ラファエロ・サンツィオ	コント・ド・ケリュス
31	ヴェールを被った聖母マリア	ラファエロ・サンツィオ	ギュスタヴ・レヴィ
32	美しい女庭師	ラファエロ・サンツィオ	オーギュスト・デノワイエ
33	竜を退治する聖ミカエル	ラファエロ・サンツィオ	ジル・ルスレ
34	ヴィーナス	ラファエロ・サンツィオ	ニコラ・ドリニー
35	ユディット	アンドレア・マンテーニャ	アルフォンス・ルロワ
36	バルナツソス	アンドレア・マンテーニャ	ジャン＝バティスト・ダンギャン

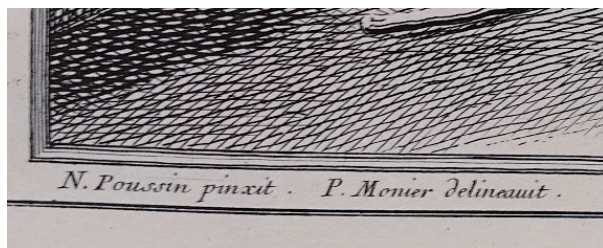
番号	作品名	原作者名	彫版師名
37	田園の奏楽	ティツィアーノ・ヴェチェリオ	ルイ＝アドルフ・サルモン
38	うさぎの聖母	ティツィアーノ・ヴェチェリオ	ジャン＝ニコラ・ロジエ
39	サテュロスに追われるニンフ	ヴェロネーゼ	アルフォンス・ルロワ
40	奏楽の天使に囲まれた聖母子	ヴェロネーゼ	アルフォンス・ルロワ
41	エラスムスの肖像	ハンス・ホルバイン	フェリックス・ブラックモン
42	東屋と柳のある風景	アルブレヒト・デューラ	コント・ド・ケリュス
43	小川に架かる木の橋	ヤン・ブリュゲル	ピーター・ホーク
44	アルカディアの牧人	ニコラ・プッサン	アルフォンス・ラモット
45	ヘラクレスに弓の引き方を教えるケイロン	ニコラ・プッサン	ジャン・ペース
46	エウリディケの死	ニコラ・プッサン	エチエンヌ・ボーデ
47	豊かな田園風景	ニコラ・プッサン	ステファン・ボーデ
48	豊かな田園風景	ニコラ・プッサン	ステファン・ボーデ
49	キリストと姦淫の女	ニコラ・プッサン	ジェラルド・オードラン
50	岩を打つモーセ	ニコラ・プッサン	クラウディア・ステラ
51	自画像	ニコラ・プッサン	ジェラルド・オードラン
52	鍛冶屋	ルイ・ル・ナン	アルフォンス・マソン
53	鷹の頭部と人間の容貌の関連性	シャルル・ル・ブラン	アンドレ・ルグラン
54	猿の頭部2点と、猿と関連した人間の顔4点	シャルル・ル・ブラン	アンドレ・ルグラン
55	男の肖像	アンソニー・ヴァン・ダイク	ジュール・マサール
56	国王チャールズ1世の肖像	アンソニー・ヴァン・ダイク	D.J. デヴァチェス
57	キリストを礼拝するパドバの聖アントニウス	アンソニー・ヴァン・ダイク	ジル・ルスレ
58	聖家族	ピーテル・パウル・ルーベンス	ルーカス・ヴォルステールマン
59	フランドルの村祭り	ピーテル・パウル・ルーベンス	アルフォンス・マソン
60	聖母の結婚	ピーテル・パウル・ルーベンス	S.A. ボールスワート
61	エレヌと二人の子供	ピーテル・パウル・ルーベンス	シャルル・シャプラン
62	コンサート	リオネロ・スパダ	ステファン＝ピカール・ロマニユス
63	聖ハドリアヌス市警備隊の士官たちの晩餐	フランス・ハルス	アンドレ＝シャルル・コピエ
64	デカルトの肖像	フランス・ハルス	アドルフ＝ジョゼフ・ユオ
65	ジブシー女	フランス・ハルス	ルイ・ジュールノ
66	レースを編む女	ヨハネス・フェルメール	ルイ・ジュールノ
67	自画像	レンブラント・ハンメルス・ファン・レイン	アルフォンス・マソン
68	ベレーを被った自画像	レンブラント・ハンメルス・ファン・レイン	G. フーケ＝ドルヴァル
69	ヨセフの息子たちを祝福するヤコブ	レンブラント・ハンメルス・ファン・レイン	J.P. ド・トレイ
70	家族の食事	ヤン・ステーン	ポール＝アドルフ・ラジョン
71	ピエロ（ジル）	ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー	ビエール・ヴィダル
72	シテール島の巡礼	ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー	シャルル・シャプラン
73	水浴のスザンナ	ジャン＝バティスト・サンテール	Ch.A. ボルボラティ
74	雅な会話	ニコラ・ランクレ	ジャック＝フィリップ ル・バ
75	割れた水瓶	ジャン＝バティスト・グルーズ	D.J. デヴァチェス
76	連作（四季－春）	ニコラ・ランクレ	E. シャンポリオン
77	連作（四季－春）	ニコラ・ランクレ	E. シャンポリオン
78	連作（四季－夏）	ニコラ・ランクレ	E. シャンポリオン

番号	作品名	原作者名	彫版師名
79	連作（四季－夏）	ニコラ・ランクレ	E. シャンポリオン
80	連作（四季－夏）	ニコラ・ランクレ	ティビュルス・ド・マール
81	連作（四季－夏）	ニコラ・ランクレ	ティビュルス・ド・マール
82	連作（四季－冬）	ニコラ・ランクレ	ティビュルス・ド・マール
83	連作（四季－冬）	ニコラ・ランクレ	ティビュルス・ド・マール
84	田園生活の魅力	フランソワ・ブーシェ	E. シャンポリオン
85	胸に腕を押し当てた裸婦	フランソワ・ブーシェ	オーギュスト・ペケニョ
86	絵画と彫刻の象徴を手にする二人のキューピッド	フランソワ・ブーシェ	オーギュスト・ペケニョ
87	打つ伏せになって花瓶を持つ裸婦	フランソワ・ブーシェ	オーギュスト・ペケニョ
88	横たわる裸婦	フランソワ・ブーシェ	オーギュスト・ペケニョ
89	水浴の女たち	ジャン＝オノレ・フラゴナール	ウジェーヌ・デシジー
90	食前の祈り	ジャン＝バティスト・シメオン・シャルダン	ウジェーヌ・デシジー
91	買い物帰りの女中	ジャン＝バティスト・シメオン・シャルダン	F. デムラン
92	独楽で遊ぶ子供	ジャン＝バティスト・シメオン・シャルダン	ウジェーヌ・デシジー
93	サビニの女たち	ジャック＝ルイ・ダヴィッド	ジャン＝バティスト＝ラファエル＝ユルバン＝マサール
94	アルコレ橋のボナパルト	アントワーヌ＝ジャン・グロ	ジュゼッペ・ロンギ
95	オイディプスとスフィンクス	ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル	ルイ＝アドルフ・サルモン
96	浴女	ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル	ルイ・ブトリエ
97	“ケレスの復讐”の習作	ピエール・ポール・プリュードン	アルフォンス・ルロワ
98	ダフニストとクロエ	フランソワ・ジュラル	ジョゼフ＝テオドル・リショーム
99	ドゥエ近郊、サン・ル・ノーブル街道	カミユー・コロ	A. プリュネ＝ドベース
100	オルフェウスの首を運ぶトラキアの娘	ギュスターヴ・モロー	エミール・スルピス
101	出現	ギュスターヴ・モロー	エミール・スルピス
102	バレエのレッスン	エドガー・ドガ	ジョルジュ・レニエ
103	踊り子たち	マリー・ローランサン	マリー・ローランサン
104	グラスに挿した野の花（秋）	長谷川潔	長谷川潔
105	イタリアの女（1版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
106	イタリアの女（2版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
107	イタリアの女（1＋2版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
108	イタリアの女（3版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
109	イタリアの女（1＋2＋3版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
110	イタリアの女（4版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
111	イタリアの女（完全版）	アメデオ・モディリアーニ	ジャック・ヴィヨン
112	女と猫	藤田嗣治	レオナル・フジタ
113	画家の肖像	藤田嗣治	レオナル・フジタ
114	人魚	ラウル・デュフィ	ラウル・デュフィ
115	旅する筆	ピエール・アレシンスキー	ピエール・アレシンスキー
116	抽象的コンポジション	セルジュ・ボリアコフ	セルジュ・ボリアコフ
117	山の湖	ルイーズ・ブルジョワ	ルイーズ・ブルジョワ
118	ヤッファ	ゲオルグ・バゼリッツ	ゲオルグ・バゼリッツ
119	リーリオナルシスシユス・ヤポーニクス、ルティロー・フローレ（ヒガンバナ）	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール

番号	作品名	原作者名	彫版師名
120	メーロー・ウルガーリス (メロン)	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール
121	フラクシネラ・オフィキナルム、ディクタムヌス・アルプス (ミカン科ディクタムヌス属)	アブラアム・ボス	アブラアム・ボス
122	マンドラゴラ	アブラアム・ボス	アブラアム・ボス
123	セドゥム・セラートゥム、フローレ・アルバ、ムルティフォルム (ベンゲイソウ科マンネングサ属)	アブラアム・ボス	アブラアム・ボス
124	アノニス・モンターナ、プラエコクス・プルプレア、フルテスケンス (マメ科)	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール
125	アストラガルス・アーフリカーヌス・ルテウス、オドーラートゥス (マメ科ゲンゲ属)	ニコラ・ロベール	ルイ・ド・シャステイヨン
126	ナルシスシウス・シュルウェストリス、ムルティプレクス (ヒガンバナ科スイセン属)	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール
127	クレーマティス・アメリカーナ・シリクォサ・テトラピュオス (キンボウゲ科センニンソウ属)	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール
128	スカモニウム・シュリアクム (ヒルガオ科サンシキヒルガオ属)	ニコラ・ロベール	ニコラ・ロベール
129	フォンテーヌブローのブナの幹	ウジェーヌ・ブレリー	ウジェーヌ・ブレリー
130	熱帯植物、ヤシ、カラジウム、バナナの木、シダ	ウジェーヌ・ブレリー	ウジェーヌ・ブレリー



『豊かな田園風景』の版画作品全体の様子



『豊かな田園風景』の版画作品の左下文字部分図拡大写真

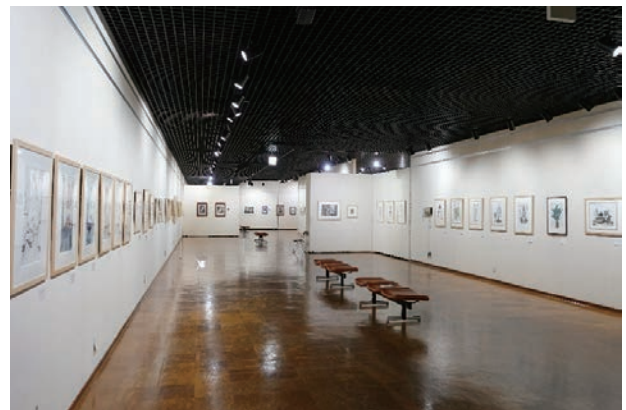
左からN. Poussin pinxit P. Monnier delineavitと書かれているのが見える。Pinxitとは描いたという意。Delineavitはデッサンしたという意。原作者ニコラ・プッサンが画を描きP.モニエがデッサンしたことが読み取れる。



釧路市美術館で開催された「ルーヴル美術館の銅版画展」の会場の様子（上左）
展示会場には注意事項が書かれた小さなパネルが見える（上右）



北網圏北見文化センター正面



同センター内の「ルーヴル美術館の銅版画展」の様子



ルーヴル美術館のカルコグラフィーの版画工房
数台の銅版画プレス機が並んでいる



カルコグラフィー版画工房内の原版保管庫
夥しい数の原版が棚に収納されている